

# 「カンタータ大いなる故郷石巻」歌詞解説

1番 春の歌です、

## 日和ヶ丘のさくら花

解説：石巻市内の小高い日和山は、石巻市のランドマーク。作詞された時には想像も出来なかったのですが、3・11の際は多くの市民が津波から逃れた場所。山の上から太平洋を望む眼下には、16mの津波で3000人もの方々が亡くなった「門脇・南浜地区」が一望出来ます。毎年春になると、山頂の公園の桜が咲き乱れ、花見で賑わいます。

かもめ のどかに 群れ飛びて

解説：太平洋へ流れ込む北上川には、かもめが飛び交います

霞(かすみ)がくれの 真帆片帆(まほかた)は

解説：時々、海辺や川には、近くの間山も見えない「春霞」(はるかすみ)に視界を遮られることがあります。その少し腫れた隙間から、昔から漁船や捕鯨船、商船、小舟などが大きな帆や小さな帆が風を受けて行き交っているのが見えたのです。

あな おもしろき 春風景

解説：あな、は「ああ、なんて」、おもしろきは、今の「面白い」ではなく、「素敵な」「素晴らしい」春の風景なんだろう。

2番 夏の歌です。

北上川の夕風や 波に砕くる 月影を

解説：岩手県と宮城県を流れる東北最大の川、北上川。盛岡市などを通り、石巻市の太平洋へ流れ込む。その川の夕方の海風から陸風に交替する時の無風状態が「夕風」。そして、夜となり、月が風が出てきた川面に砕かれて見える。

漕げば 櫓音の冴えわたり 夏は涼しき 内海(うつみ)橋

解説：川の上を船を勧める手漕ぎの櫓の音が響き、暑い夏も涼しく感じるのは、北上川の河口近くの小さな島を両岸から渡す橋、内海橋の上からだ。ちなみに明治時代からあった内海橋だが、3・11で大きな被害があり、仮設橋での往来が続いたが、隣に新内海橋が完成した。

3番 秋の歌です。

港頭(こうとう) 秋の風立てば 牧の嶺近き 御所の山

解説：石巻港、石巻漁港に秋風が吹くと 湊(みなと)地区牧山の零羊崎(ひつじさき)神社周辺、御所の池周辺の山々には、との意味。

3・11では、石巻旧市街と北上川を挟んで対岸の湊地区も津波で大きな被害を受け、当日は、多くの市民が牧山に逃げた。

紅葉の錦 織なして 映ろう水の美しき

解説：紅葉の鮮やかな赤や黄色の織りなす色彩が、御所の池に映える。

#### 4番 冬の歌です。

千古の色の 常磐木（ときわぎ）や 羽黒楊武の へだてなく

解説：1000年前からの緑のままの常緑広葉樹よ、昭和4年に竣工したばかりの戦艦「羽黒」や日本に発注され、大正5年沈没した韓国初の軍艦「揚武」などの区別もなく、つまり世の中の移り変わりに関わりなく。

なお、楽譜の楊と軍艦の揚には違いがあり、誤記かと。ちなみにこの石巻風景は、佐藤露江の昭和8年の作詞、とすれば、既にヒットラーが政権につき、日本は国連を脱退し、北支へ侵攻、そして三陸沖地震津波で3000人の死者を出した年。あくまで、「羽黒楊武」は齋藤の解釈。

雪白砂の伊寺水門 冬しずかなる 朝ぼらけ

解説：石巻は、“伊寺水門”と呼ばれ、北上川河口の小さな水郷の村として栄えたのだが、同時に、馬の産地であったため、多くの牧場があった。そのため、“いじのみなと(伊寺水門)”が、“いじのまき(伊寺の牧)”となり、さらに、“いしのまき(石巻)”と呼ばれるようになったという。雪が砂のように降り積もり、冬景色に包まれ、静かな夜明けを迎えている。

#### ②P50、7、8小節 P51 15、16小節 20小節

・いきなりEの音がーオクターブ上がるので、慣れること

#### (3) 第4楽章 ～祝祭～

3・11以降は、海への複雑な想いがあり、また4000人近くの方々が犠牲になったことから、特別な終曲となった。ちなみに2013年石巻での演奏も、ここで合唱団の方々も涙。「10年前には横で歌っていた仲間が津波でやられて、今ここで一緒に歌えなくなった、という寂しさが込み上げてきた」と。また、2015年、和光市での第4楽章だけの演奏でも、石巻から遠征してきた合唱団40人だけでなく、首都圏の合唱団や観客も涙し、特に石巻出身者の方々は号泣した、という曲。

#### ①P57～59

- ・ゆっくりで、かえってリズムを取るのが難しいので、しっかりカウントする。
- ・まず、音符の長さの確認。四分音符をひとつ、と数えると、二分音符は2つ、付点がつけば3つ、全音符なら4つ、です。
- ・この曲は先に大人たちが歌ってきたのを児童やソリストも加わり、全員合唱で盛り上がり、観客にも「石巻を讃えよう」と呼びかけ、感動のうちに終わる。

#### ②P57

- ・冒頭に「83小節から最後までは、大らかに音を充分伸ばして歌う」と書いてあるように、全体にスローになる。

## 作曲：小杉太一郎



1927年（昭2）6月6日 映画俳優であった小杉勇の長男として生まれる。（旧本籍：宮城県牡鹿郡石巻町旭町）

1949年（昭24）東京音楽学校（現 東京藝術大学音楽学部）作曲科入学。池内友次郎氏に対位法及び和声学を、伊福部昭氏に作曲法及び管弦楽法を師事。

1952年（昭27）第21回毎日音楽コンクール（現 日本音楽コンクール）作曲部門第二部（室内楽部門）において《六つの管楽器の為のコンチェルト》が第1位入賞。

1953年（昭28）卒業目前で学校中退。東映映画『健児の塔』で初の映画音楽を担当。

1955年（昭30）内田吐夢監督作品『血槍富士』の音楽担当を契機に本格的にプロとしての作曲活動を開始。

写真提供／略歴作成：小杉家

1976年（昭51）8月9日 膵臓ガンのため死去。享年49歳。

作品：カンタータ《大いなる故郷石巻》、舞踊組曲《戦国時代》、舞踊音楽《鷲と少女》、同《杜子春》、同 日本の太鼓第三輯《綾の太鼓》、同《熊の見しもの》、同《トルソー》、同《ラ・トレスカ・バルバラ》、管弦楽《交響楽》、室内楽《六つの管楽器の為のコンチェルト》、同《弦楽三重奏の為の二つのレジェンド》、吹奏楽《吹奏楽の為のルンバ》、同《吹奏楽の為の行進曲》、箏曲《双輪》等。他に『宮本武蔵』シリーズ（第2作目以降）（内田吐夢監督作品）、『彫る・棟方志功の世界』（柳川武夫監督作品）等、映画及びテレビの附随音楽多数。ストラヴィンスキーを敬愛し、世界の民族音楽と楽器（特にアフリカ、中南米、インドの打楽器）に関する資料の蒐集や研究を行う一方、日本民謡の研究にも情熱を注いだ。これらをまとめた著作と訳は何れも未完に終わった。

趣味はクレー射撃、狩猟、ボウリング。他にカメラ、油絵、茶道など。

---

## 作詞：石島恒夫



昭和5年8月6日生まれ。早稲田大学文学卒。昭和47年度仙台放送社会功労賞受賞。脚本「ピカドン先生」「鑄銭場物語」舞踊音楽「わかふじ賛歌」（杵屋正邦作曲）など。元石巻芸術協会事務局長、石巻文化財保護委員、石巻市民交響楽団事務局長等を歴任。

「父は日々の商いの傍ら、早朝にまた家族が寝静まった後、小杉太一郎先生に作曲して頂くことになっているカンタータ「大いなる故郷石巻」のテキスト作りに没頭していた。あれは、いまから40年ほど前のこと。当時、中学生だった私は今でもはっきりと、その父の机に向かう後ろ姿を覚えている。早稲田で演劇を専攻していた父は長男でとりわけ祖母を慕っていたためか、夢を封印し、家業（酒屋）を継いだ。

《この道しかない春の雪ふる》。山頭火のこの句が書かれた色紙を父は本棚の隅にひっそりと置いていた。静かなその父はしかし、故郷に熱い心を注いだ。その眼差しは家族に向けられたものとほぼ同じだったように思う。いずれ故郷を去ることが分かっていた息子（私）に父は故郷の海をよく見せた。美しいリアス式の海岸線をいったい何度、私は父の車で走ったことだろう。

「ここが月の浦だ」。

支倉常長がローマに向けて出帆した美しい入り江。

「あそこでクジラを解体する」。鮎川ではそのクジラを狩る漁師たちの姿を私に伝えた。いつも、帰り際には、「女川」でその日の食卓に乗る魚を父は選んだ。その父の嬉しそうな表情を忘れない。売り手と買い手両方が湛える満面の笑みは、この土地の自然の恵みと人の心の豊かさ故のものだっただろう。

今回の災害でその自然も人もたくさん失われてしまった。私自身も失われた記憶の風景に言いようのない無力感を感じ、慟哭した。しかし、父が今いれば、こう言った筈だ。

「海は大丈夫だ。そしておれたちの心も！」

この辛い日々を乗り越えるために、カンタータ「大いなる故郷石巻」は40年も前に作られていた。そういえるかもしれぬほど、音楽はしなやかでちからづよく、やさしい。小杉先生もまた父同様、故郷をこよなく愛しておられたことをこの作品は教える。

中学生の頃、父に連れられて世田谷にあった小杉太一郎先生のお宅を初めて訪れたとき、先生は私にストラヴィンスキーのオーケストレーションの素晴らしさについてお話し下さり、そしてラヴェルの「マ・メール・ロア」のフランス製のポケットスコアを貸して下さいました。自信に満ちたその佇まいに、作曲家とはこういうものかと思った。その後、私が作曲を生業とし、またラヴェルを研究していることを、この場をお借りして先生の御霊に慎んでご報告申し上げたい。

石島 恒夫 次男

作曲家・桐朋学園大学教授

石島 正博

# 参考：石巻市

戦国時代末期、伊達政宗は葛西大崎一揆で秀吉に反抗を画策したが、豊臣秀吉に発覚し、領地を今の福島県・宮城県南部・山形県南部から宮城県全域・岩手県南部に領地替えされ石巻地方は伊達氏の領地となった。

慶長 18 年（1613 年）、伊達政宗はスペイン帝国との通商交渉のためにスペイン王国およびローマ法王庁に支倉常長を正使とする慶長遣欧使節を派遣した。政宗はメキシコとの太平洋貿易を計画しており、石巻近くの港でサン・ファン・パウティスタ号を建造して石巻の月の浦から出航させた。このとき、それまで小さな漁村だった石巻は“国際貿易港”として整備された。しかし、スペインとの通商は実現しなかった。

伊達政宗は仙台領内の新田開発を目指し、家臣・川村孫兵衛に命じて“東北地方最大の河川”・北上川の流れを変えるという大工事を行った。こうして北上川は現在の石巻港付近で太平洋につながった。

江戸時代の石巻港は、北上川水運によって南部藩領からも米が下り、河川交通と海運との結節点として、日本海側の酒田港と列んで奥羽二大貿易港として全国的に有名であった。また、東北太平洋岸海運の拠点として、千石船による江戸（東京）との交易も盛んで、江戸期の長い期間において石巻港から江戸へで送られた米は、江戸市中で流通する米の半数を占めたと言う。藩政時代には名実ともに仙台藩の経済の中心地であった。また旧仙台藩内で唯一貨幣の鑄造を許され、現代でも鑄銭場という地名が石巻駅前に残っている。

戊辰戦争で敗戦した仙台藩が、明治元年に表高 62 万石から 28 万石に知行域が減らされた際、石巻とその周辺は仙台藩から分離され、高崎藩取締地を経て石巻県となり、明治政府の直轄となった。高度経済成長期に至るまで、船運が鉄道やトラック流通に置き換わっていったため、港の機能は沿岸漁業から遠洋漁業まで対応する漁港として発達し、また、石巻工業港の建設によって第二次産業も発達した。これらの産業基盤によって都市化が進み、商業などの第三次産業労働者が多くを占め、宮城県東部の商業拠点となった。都市圏人口もバブル景気まで伸び続けた。宮城県では仙台市に次いで大きな市となる。

**3・11**—2011 年 3 月 11 日、東日本大震災はすぐそばの金華山沖を震源地として発生、旧市街の中心部の大半は津波に襲われ、このほか、牡鹿半島や雄勝など周辺でも大きな被害を被り、約 16 万の人口で、死者・行方不明者 3975 人（2016 年 3 月総務庁）という甚大な被害を被った。特に、日和山を背にした海岸近くの平地、南浜・門脇地区には、16m の津波が押し寄せ、2000 人近くの方が亡くなった。また、石巻市とは合併しなかった隣の女川も 20m 近くの津波で、町が壊滅。人口 1 万のうち、約 1000 人もの死者・行方不明者を出し、近くの女川原発も、あと 80cm、という「あわや」の危機だった。さらに奥の北上川河口から 4km の石巻市大川地区の大川小では、避難誘導の遅れで、74 人の生徒、10 人の教職員が津波の犠牲になった。